

史料紹介

綱光公記 — 寛正三年曆記(一) —

はじめに

『東京大学史料編纂所研究紀要』二〇号・二一号所載の「綱光公記
文安三年・四年曆記」「綱光公記 享徳三年曆記」に続き、本稿では広
橋綱光の寛正三年曆記を翻刻・紹介する。なお分量の都合から、今号で
は九月記までを収め、十月記以降は次回に掲載する。本記の性格につい
ては二〇号を参照していただきたい。

寛正三年(一四六二)記は、現在『綱光公曆記』として国立歴史民俗
博物館に所蔵されている(広橋家旧蔵記録文書典籍類H六三―八三八)。
間明き二行の同年の書写具注曆一卷に記され、紙背文書はない(全五一
紙)。題簽には「綱光公曆記(自寛正三年正月一日至十二月卅日 自筆
本/首欠(正月欠)) 壹卷 『綴合改めたる通り』とあるように、正月
記は欠けている。本年の曆記には貼り継ぎ箇所はない。ただしこれまで
同様「委注別記」(五月二九日条)といった表現が複数見え、綱光は曆
記とは別に日次記あるいは別記を記していたと考えられる。このうち六
月一日の「綱光公神今食参仕記」(国立歴史民俗博物館所蔵。広橋家

旧蔵記録文書典籍類H六三―六七二)、五月二三日と七月二五日の「御
台御産申沙汰記」(広橋真光氏所蔵)が現存している。「綱光公神今食参
仕記」はごく短いもので、本稿の末尾にあわせて掲載した。題簽に
は「綱光公神今食参仕記(寛正三・六・十一) 自筆本 一通」と見える。
前年寛正二年(一四六一)一月二七日の曆記の仮名曆を翻して記して
いる。一紙分が残っているが、末尾に数行分の余白が残り、あるいは執
筆途中のものかと思われる。

寛正三年のこの年、綱光は三二歳で、正三位権中納言となっている。
嫡男兼頭も一四歳、従五位下となり、綱光に同行する様が見える。天皇
は後花園天皇、將軍は足利義政である。本年七月には、將軍御台所日野
富子が女兒を出産するが、綱光はその御産御祈の担当奉行として奔走し
ている様子が見える。また当時は、政治的混乱、長祿・寛正の大飢饉な
どの影響もあり不安定な世情であった。九月には、梅津長福寺での騒動
に端を発して、山名氏と侍所京極氏が一触即発の状況になった(新田英
治「中世の日記を読むにあたって」学習院大学文学部史学科編『歴史遊
学 史料を読む』山川出版社、二〇〇一年参照)。山名氏と管領細川氏

遠須 田中 藤
遠藤 中田 藤
珠牧 奈有
紀子 保一 郎

も対立し、山名宗全の子で細川勝元の猶子となっていた山名豊久が離縁されるところの噂も出ている。最終的に所司代多賀出雲守の弟の切腹で手打ちとなるが、騒然とした雰囲気は漂っている。綱光の周辺でもこの件に絡み、近親の女性と推測される西御庵が、大慈院南御所（足利義教女の御所）を追放された。綱光は「一門之蒙然、為之如何」「当座所迷惑也、世上及大篇事、歎有余事也」（八月二十六日条）と嘆いている。この騒動の中、洛中では土一揆が発生し、諸大名が発向している。

一方で、義政が高倉御所の造営、十二間の障子絵の制作などに趣向を凝らしている様子もうかがえる。また伏見宮での源氏物語談義、綱光家中での連歌会などの文化的な記事も多い。

末尾になるが調査・翻刻を御許可下さった国立歴史民俗博物館に深謝申し上げる。

なお本稿は遠藤（科学研究費補助金・若手研究B）・須田（同）、「古記録の史料学的な研究にもとづく室町文化の基層の解明」（科学研究費補助金・基盤研究B、研究代表榎原雅治）の研究成果の一部である。

【凡例】

- ・翻刻に当たっては、具注暦部分は略し、日付と干支のみ、ゴシック体で示した。推測によるものは（ ）を付した。
- ・文字はおおむね現時通用の字体に改め、改行は原則として追い込みとした。傍書・挿入箇所も適宜本文中に追い込みとした。
- ・本文には読点および並列点を適宜加えた。
- ・尊敬を表す闕字は適宜存した。
- ・欠損の箇所はおよその字数を計って□または□で示した。抹消された文字は左傍に、を付し、判読不能の塗抹文字は、およその字数を計って■または■とした。判読不能の文字は☒で示した。
- ・本文中で校訂により改められるべき文字や加えられるべき文字は「 」、人名注など参考のためのものは（ ）に入れ傍に記した。
- ・なお人名注は現在通用する家名および名を用い、各月の初出時に示した（例えば室町殿は足利三春あるいは義成でなく義政とした）。入道した者については、まず法名を示し、続いて俗名を示した。
- ・その他、適宜○を付して注記を示した。

(二月)

一日丙寅、

晴、早旦先奉拜尊神等如每朔、次參賀(足利義政) 室町殿、構見參、次御台御方(日野富子)・

高倉御所等如例、入夜參 内、被下天酌、珍重々々、依番宿直、

四日己巳、

晴、有連哥会、大河端豊後頭役也、

六日辛未、

雨下、入夜參 内、典侍殿局臨幸也、併万代御嘉例也、珍重々々、每

事如年々、折卅余也、予十余合沙汰進之、曉更還御、小生(兼綱光)同召具

参 内、

七日壬申、

晴、入夜參 内、新典侍局臨幸也(甘露寺親長)都護卿每事致其沙汰云々、

八日癸酉、

晴、向日野亭、大飲酒也、

十日乙亥、

晴、尺加堂遺教經聽聞、日野大納言依有音信也、於局有盃酌、四辻

前宰相并樂人等入来、有付物等、不無其興、同晚同車帰了、入夜自

内裏雖有召、依難治不参、勾当局臨幸云々、小生兼頭参 内、有手猿

楽云々、

十一日丙子、

晴、早旦向飛鳥井宿所、日野大納言招請也、藤中納言入道・伯(資益王)・

藤宰相・頭弁以下濟々也、入夜分散、有当座統哥并連哥等、大飲酒也、

昨日一種一荷遣了、

今日女中吉田社以下方々參詣、珍重々々、御願成就勿論々々、

十二日丁丑、

晴、御月忌如例、

抑昨日自 室町殿御直廬渡御之時、御建蓋・御台・壺・御盃以下、被

下典侍殿、此間無御所為由、被聞食故云々、御台御申云々、畏悅過

分、珍重難尽言詞、大幸万幸之事也、御使御庵也、

十三日戊寅、

晴、有連哥会、景敦頭役也、佐々木(被官、下同シ)彼官瀧本入道入来、有此席、抑今

日二条家門北政所、慈母御方光臨、終日大飲御酒也、珍重々々、兼又

御捧物、(杉原十)今日付樽葉了、

十四日己卯、

晴、時々猶雨下、

十五日庚辰、

今日祇園社進代官、例年百度沙汰也、当年別而二百度也、

晴、涅槃會也、仏舍利供養如例年、精進、

抑来廿九日、八幡御社参、扈從事御点由、中山大納言告送、祝着也、

但大柴、為之如何、

今日豊後南都下向、依慈恩院事也、例年花笠枝、遣右馬頭許了、

十六日辛巳、

晴、依番参 内、

十七日壬午、

晴、七觀音七人詣、二度分立願、且今日男共以下、為代官參詣、珍重

々々、弥所願成就勿論々々、

廿一日丙戌、

晴、自 室町殿、大閣明日御会御參事、内々被取申由、日野大納言申

之、此事、此間被申所望之處、武家時宜不測間、為 叡慮、可被仰

事如何由、被申間、直 室町殿被出微望云々、尤可被參申事歟、当道

之物匠也、

廿二日丁亥、

晴、自晚景雨降、依御連哥御會 室町殿御參 内、去年御還礼也、折・

御一献、每事如去年、自御直廬御參也、於黒戸有其儀、事了、於常御

所、有一献、大閣御連哥事了令早出給、二条前閔白猶令祇候給、此

段兼日被治定了、御発句 室町殿、再三及 勅定了脇(持通) 御製、第三

親王御方、第四竹園(成仁親王ノ子後土御門天皇)、第五大閣、六前閔白、以下次第申之、予只一句

申之、不堪未練至極、為之如何、兩所一献、及十五献了、公私大飲御

酒也、寅刻以後還御也、

廿三日戊子、

雨下、八幡御社參、經榮(管)之外無他事、

廿四日己丑、

雨下、

廿五日庚寅、

雨下、

廿六日辛卯、

晴、

廿八日癸巳、

晴、弁才供養如何、

廿九日甲午、

晴、八幡御社參也、為扈從出仕、有別記、

三月大

一日丙申、

晴、早旦參(足利義政) 室町殿、構見參、又御盃如何、旁珍重々々、入夜參 内、

被下天酌、祝着々々、

二日丁酉、

晴、早旦參 室町殿、御社參無為御礼、公武人々同進上御太刀、其後

三日戊戌、

晴、曲水宴、早旦參 御所、構見參、人々同之、豊松參内、鳥一羽隨

身了、入夜參 内、被下天盃、祝着々々、

九日甲辰、

雨下、豊松詣御庵、為花有二舞興、但無益事歟、

十日乙巳、

晴、詣御庵、今日光聚院(日野重光ノ女)令人來給故也、為花之見物(也)云々以外之大飲

沈醉、言語道断事也、入夜帰宅、

十一日丙午

晴、御談義云々、依余醉不參、さか木卷(賢木)、事了云々、無念々々、

十二日丁未、

晴、御月忌如何、及晚參 内、有猿樂、七条龜大夫仕之、十番沙汰之、

雜人群集如雲霞、依如此之儀御隱密之間、及夜景有其儀云々、曉更以

後事了、退出、

十四日己酉、

晴、

十六日辛亥、

晴、參 内、依番也、

十九日甲寅、

晴、自昼程雨下、參 内、今日源氏御談義也、大閣令參給、自花散里

至(須磨)才ま半程、事了、其後親王御方猶御祇候、有御連哥、執筆泰仲勲之、

曉更以後事了云々、予早出、

廿日乙卯、

晴、向宮内卿法師宿所、日大母儀(日野勝光)北小路殿母、去比死(他界云々)去云々被住此

所聞、為相訪也、次向日大亭、同相訪畢、御台御座事也、宮内卿宿所

者左遷事歟、不可然者乎、

廿四日己未、

晴、参 内、有源氏御談義、(須磨也)

廿五日庚申、

晴、祖母御月忌如例年、於瑞雲院致其沙汰、今日有月次連哥、(藤堂)景富頭役也、

廿七日壬戌、

晴、慈母依吉日、今日御局御帰也、(近江神崎子、細光祖父兼宣ノ女)自来月二日、新殿可有御座分治定、

千秋万代儀也、珍重々々、

廿八日癸亥、

晴、弁才供養如例、(摂津満親ノ女)春日局遣宮内、(近江神崎郡)是御園闕所事也、

廿九日甲子、

雨下、詣光聚院殿、御園与市原堺相論問事、為申合也、春日殿無等閑之段肝要由、被相語給、所詮今夕参 御所可申入云々、御奉書以後及弓矢之条、緩急由被仰付御園三郷也、奉行一方面申沙汰故也、為之如何、山門以下面々一同歎申入了、

四月小

一日丙寅、

晴、早旦出仕、構見参、珍重々々、入夜参 内、被下天酌、祝着々々、依当番宿直、平座藏人弁俊(功徳)躰奉行、上卿洞院大納言、少納言宗賢朝臣也、

六日辛未、

晴、自今日於瑞雲院始作善、至来十二日、

七日壬申、

雨下、自今日詣瑞雲院、為作善也、(広橋兼題)小生為学問同道、夜々男共相番宿直、

昼程自御所有召由、告送之間、参 御所、御寢殿棧・橘両樹、可被植

丈数事也、即帰寺、

八日癸酉、

晴、

九日甲戌、

晴、院中造作・室礼沙汰直了、

抑明日、日大亭、(日野勝光)室町殿渡御之間、(足利義政)為見訪、罷向了、頃之帰寺、折

十合沙汰遣了、

十日乙亥、

晴、室町殿日野亭渡御、及暁更還御、時宜快然云々、早旦詣御庵、有中食、面々同御出、其後被北殿、(参)当年初度也、雖為断酒有一献、

珍重々々、御局以下面々御出也、(広橋綱子)

十一日丙子、

晴、

十二日丁丑、

晴、行施我鬼一会、如形取行者也、中食以後、帰家詣誓願寺、次帰寿域、今日男共賜中食了、御局於西殿有御沙汰、面々令詣瑞雲院給、今日百万反念仏誦了、

十三日戊寅、

晴、慈母・御局等、於予方奉勸魚味、日大有使者、可入来云々、相統伊勢守有使者、有被仰下事、可賜人云々、遣速水掃部、(景徳)予朝飯以後、

念向日大亭、(正親町三条実雅)三条知行分十个所可被返下事也、先之青侍馳来云、念書立可給由也、歡喜心中何事如之、即帰宅注遣了、祝着無極、冥慮至也、

十四日己卯、

晴、早旦参 御所、伊勢守依申送也、(之種)飯尾左衛門大夫来予前、賜御判一紙、十个所悉被返付云々、祝着眉目之至、併忘舞踏、一段時宜過分至也、文言不及□見、旧領故也云々、抑御台連々窮困式被申驚、如此

至也、(日野富子)抑御台連々窮困式被申驚、如此

也、

三日丁酉、

晴、祈祷昨日結願、然当月分自今日始行、珍重々々、

四日戊戌、

晴、自所々粽到来、

抑善阿弥来、之間云、楓木一本、槇木一本可進上云々、仍進上高倉御

所、付千秋方、御庭奉行、面々有送文云々、相副了、

送進 広橋家

鶏冠木 一本

槇 一本

以上、

五日己亥、

晴、早且參賀 (尾利義政) 室町殿、如朔日、幸甚々々、入夜又參 内、天酌 天

盃祝着至極也、

端午慶珍重々々、

六日庚子、

晴、雨下、山科中納言顯言卿今日円寂云々、尤以不便、風氣故云々、

近臣也、殊可哀々々、生年卅五歲也、依無実子保宗卿子相統云々、就

其聊有相論事、可加扶持由青侍門外来訴者也、仍申典殿、(侍殿)被申 室町

殿了、

七日辛丑、

晴、今宮祭礼無為云々、

八日壬寅、

雨下、

九日癸卯、

雨下、(広橋兼顯) 小生詣御庵、今宮祭見物云々、

十日甲辰、

晴、二七今日祈祷、今日已刻結願、所願成就珍重々々、僧都山上下向了、施物三百疋下行之、

十二日丙午、

晴、御月忌如例、

佐伯庄御讓与尊靈信釈尼御月忌也、如形致其沙汰、

十四日戊申、

晴、祖父御月忌如例、

抑今日詣代官於七仏薬師堂、是春日局所勞、(根津滿親ノ女)被出撰津宿所問、為祈祷也、行水即召進了、所願成就勿論々々、数日事也、為之如何、

十七日辛亥、

晴、依番參 内、有御修法、不動小法、(増進)実相院令參住給、明後日結願

云々、勸修寺黃門閑談、

十八日壬子、

晴、(美濃本巢郡)輕海郷重支状、今日付左衛門大夫、両方二問申状也、只仰冥助可

憑々々、

入夜向菅重相亭、三位局事訪之、(東坊威孝子)勾当内侍同訪之、於門外以青侍申遣了、

廿日甲寅、

晴、(広橋仲子)崇賢門院御月忌也、如形致其沙汰、精進念仏、

廿一日乙卯、

晴、自今日七今日御本地供花、是毎年儀也、

廿二日丙辰、

小雨下、万里路重相入来、(寛正二年、幸房死去二日斷絶)是清問寺遺跡愁訴問事也、勸来衆、

廿三日丁巳、

雨下、雷鳴、及晚雨晴、(伊勢貞親)伊勢守有使者、御産御祈可被仰諸社諸寺、可

申沙汰云々、中山大納言(親通)依歡樂被仰云々、畏承由申入了、例日も、明日尋日次可申沙汰由返答、

廿四日戊午、

晴、早旦參 室町殿、御祈日日次事為次事為伺申也、直詣御庵、面々御出、

今日光庵御月忌、有中食、其後有二弓祝、是噶食觀音經誦修間、殊更

盃代先日召進間、今日御沙汰也、珍重々々、帰家後御祈事方々相触、

無他事、御願円満勿論々々、有別記、

廿五日己未、

晴、伊勢守申送云、自明日於常御所可被始行御修法、脂燭等事可申沙汰也、可存知由返答了、是御産御祈也、金剛童子法(小)可為少法云々、阿

闍梨聖護院准后、

廿六日庚申、

晴、早旦參 室町殿、御産御祈事伺申入了、申次伊勢肥前守也、次詣三寶院、心静閑談、御祈事諸門跡相触者也、申刻計參 御所、依御

修法開白也、有別記、始行以後退出、

廿七日辛酉、

晴、御修法中間、入夜出仕、即退出、

廿八日壬戌、

晴、申刻計行大荒神祭、新長講堂觀音院長老入來、是自万里(万里小路之房)拳來也、

珍重々々、所願弥成就勿論々々、仍自昨日家中神事精進沙汰之、於中

門沙汰之、入夜參 御所、自方々今日御卷数到來、

廿九日癸亥

晴、自方々神社・仏寺・諸門跡、今月御卷数到來、預置了、委注別記、

卅日甲子、

晴、早旦參 室町殿、毎月并三合後年御祈御卷数、自所々到來分、悉

以紙捻結之、持參 御所、御御頂戴、アワセテ取退出、先伊勢守

御楊子(稗)藥師像(安利)持參也、其後予持參也、每度儀如此云々、御修法・御台御加持等事有別記、

六月小

一日乙丑、

晴、早旦參賀 室町殿、先奉拝尊神等、構見參、如每朔、珍重々々、御台御方・大方殿等參賀、御盃又以同前、珍重、入夜參 内、天酌以

後退出、祝着千々々々、

信高靈位月忌、尼公沙汰遣了、

二日丙寅、

晴、未明參 室町殿、御修法結願、御撫物両御所分取之、付申次伊勢

備中守之後、退出、御台御方御卷数二枝有之、

三日丁卯、

晴、御台御方御産所御出初也、尤以珍重、平安若公御誕生嘉瑞也、幸

甚々々、一色宿所也、

四日戊辰、

晴、依番參 内、

七日辛未、

晴、祇園御興迎延引、依山訴云々、可驚可恐、日吉八王子造榮江州一

国広田段銭事、雖申請云々然、而広田事依無御領状云々、無其例故也、

為之如何、山訴事外申狀歟、

八日壬申、

晴、早旦參 御所、御八講申沙汰由被仰下間、僧名等為伺申也、持參

御前披露之、法転院公範僧都闕請房讚僧都被召出了、有別記、抑申沙汰事、伊勢守伺申者也、

十一日乙亥、

晴、參御所付御障子舞御覧繪問事也神今食參行、月次兼行畢、有別記、

十二日丙子、

晴、御月忌如例、昼程向藤中納言入道亭、(高倉永徳)日野招請故也、入夜帰宅、

大飲酒也、昨日月次・神今食散状持參御所、

十三日丁丑、

晴、正誕(生脱之)日也、有祈祷、

十四日戊寅、

晴、祇園会延引、

十五日己卯、

晴、祇園臨時祭延引云々、又雨下、

十六日庚辰、

晴、時々雨下、今日物祝着、又方々召進之、珍重々々、

十七日辛巳、

雨下、細河右馬頭(持賢)入來、千疋持來、先日入來謝之、即遣引物太刀・

繻子一段・盃(紅雄者)遣也、

十八日壬午、

晴、參 御所、十二間御障子繪舞事也、人々注進舞御覽目錄持參、付

結城勘解左衛門方了、仙翁花二本進上之、未初被御覽、即被立御花

瓶了、諫方信濃守入來、

十九日癸未、

晴、依召參 御所、舞裝束自御蔵被召寄、御障子繪被校合了、(豊原)治秋・

縁秋等朝臣以下祇候、加檢知了、

廿日甲申、

晴、御八講(寺持)申沙汰也、仍早旦出仕、進散状、午一点參講堂、其儀

有別記、松林院并常樂院等送樽等、

廿一日乙酉、

晴、早旦出仕、進散状如昨日、其後着裝束、參講堂、

廿三日丁亥、

雨下、

廿四日戊子、

晴、御八講結願御布施、今日未剋(時)分皆済云々、其後御講始行、早

旦出仕進散状、今日御願御布施違乱故、可及違乱由申入了、御願文申

出御署了、御諷誦加益光朝臣了、鐘弁者五个日俊(坊城)頭參仕、

廿五日己丑、

晴、早旦參 御所、御講無為御礼也、僧俗參賀、御講(昨日)及暁天之間、

今朝各參賀也、去年如此、

廿六日庚寅、

雨下、參 室町殿、御障子繪事也、右舞人祇候舞、予以下為檢知也、

廿七日辛卯、

雨下、出仕、舞繪事也、左舞人祇候、加檢知了、

時町(町)闕如屋出來、藤中納言入道相共(之種)加下知之処、南禪寺号御寄進

云々、仍申披問無為由、飯尾左衛門大夫申送者也、

廿八日壬辰、

雨下、自方々御卷数到來、取集置者也、

抑就御障子繪事、舞御覽散状方々相尋者也、

廿九日癸巳、

晴、時々雨下、早旦參 御所、為御卷数進上也、無御出、仍付申次進

之、帰宅後六月被沙汰之、珍重々々、如例年、及晚春日伊勢宿所御風

炬渡御云々、仍參 御所、六月御輪役為勲仕也、珍重々々、有別記、

七月小

一日甲午、

晴、奉拜詣尊神等、次參賀 室町殿、(足利義政)構見參、御台御方・(日野重子)大方殿等參

賀如例朔、入夜參 内、彼是祝着々々、初秋朔幸甚々々、

三日丙申、

晴、參 御所、繪間事也、自方々注進扶狀進上之、

五日戊戌、

晴、有御沙汰事間、面々御出、終日大飲也、併慈母面々豊子女王万秋之嘉例也、

幸甚々々、御局広橋御子・御庵等明日可有御還云々、

六日己亥、

晴、結城勘由辭脱左衛門入來入來、高倉殿南門脇壁可被塗敷由御尋也、

大閤一条兼良可申談由被仰下了、仍參彼御亭、大閤(二)兼教房・関白令出座給、室町殿御

所以為同事、縦又雖為女房御所母国子堂云々、旁不可有子細云々、參

御所、付結城中入了、

七日庚子、

晴、早旦出仕、構見參如朔日、珍重々々、抑被進 禁裏御花立二水親対新新論論、

御盃二枚桂如去年被進之、予為御使、於末口付冷泉前宰相申入了、

蒙 勅答婦參、自高倉殿還御以後申入了、先例者進一人相副了、當時

御一献者計也、如何、入夜參 内、献詩如每年、御樂以下如年々、御

花立進上之、七葉手向七夕良辰、珍重々々、御樂奉行四辻中納言也、

(松本)宗綱朝臣為理運敷、如何、

八日辛丑、

晴、參 御所、為 内裏御使、女房奉書為披露也、付伊勢備中守申入

了、小番結改事、左近府駕了諸役免除事也、有別記、

九日壬寅、

晴、午剋計參御所、御障子繪土左彈正中書披露事也、於寢殿猶相違所

直付了、入夜退出、抑採桑老四帖舞可伝受由被仰下、可申依申入入退

出、

十日癸卯、

晴、早旦山科筆千代丸出仕初也、日野大納言同道也、予為扶持出仕、

其後退出、即參高倉殿、南門立柱上棟也、珍重由申入退出、未剋又

參 御所、十二間立柱上棟也、公武御太刀進上之、御所其儀如常、御

馬大名外日野・烏丸・三条外不進間、雖令懷中令略了、吉時申剋也、

後聞、三寶院以下少々諸門被申礼云々、

十一日甲辰、

晴、午剋計參 御所、神宮行事上卿・弁、神祇官修造并禁裏小番結改

事、被申 室町殿、女房奉書為披露也、清華輩今度如先規被入之、内々

小番依無先例、被加小番六十人番帳、同入見參、此事先度被申談了、

仍自 室町殿嚴密被仰付分、可相触由、被仰下之後、退出後、修造事

可仰頭人等也、上卿・弁事、万里少路大納言(冬房)・宣胤朝臣等可仰也云々、

于時秉燭時分也、

十二日乙巳、

晴、早旦詣瑞雲院、有施我鬼、中食以後參 御所、七夕御花立被返進、

女房奉書為披露也、令申上野民部大輔申入事退出、依有所勞氣也、於

御花瓶・盃者、直納御藏靱井方了、抑昨日条々、今日各加下知、小番

事、十番々頭以奉書相触者也、清華輩先年無謂被申免由、及御執奏之

處、今度被任先規、尤以珍重、殊勝事也、有別記、

十三日丙午、

晴、女中被出西芳寺、為燒香也、

十四日丁未、

晴、依召參 御所、 禁裏御灯呂(被進之)為御使也、即參 内、招

前宰相申事由、蒙 勅答退出、又伏見宮・親王御方各一被進之、同為

御使參任、竹園御出座、御祝着由、得其意可申入云々、婦參 御所、

以春阿弥申其由、只今御台可有御出御產所云々、珍重々々、然不及其

儀、於常御所姫君御誕生、平安御坐云々、若君無御座条、雖無念事、

平安御事、尤以大慶珍重々々、一身祝着也、委見御祈記、御祈結願事

伺定退出、

十五日戊申、

雨下、風烈、自夜猶不止、雖可詣瑞雲院、昨夕、如例年令申燒香之間、存略、御靈供等、如近年可致沙汰由、自兼日院家加下知、殊更於持仏堂、少々沙汰之、如去年方々荷葉供御進之、如例年、又自撰津方兩所又到来、祝着万代儀也、自当年西御庵若御(アキマ)進之、予依猶子儀也、

彼是珍重々々、御産所通達申間、不參 内、不進灯呂、御局無御出、

至西殿有御燒香、

十六日己酉、

晴、御台御出御産所(義直)云々、尤珍重々々、方々御祈結願事相觸者也、

十八日辛亥、

晴、御靈祭祀無為云々、室町殿七個日雖御産穢中、於門内御拜見云々、

伯卿(資益王)被尋仰云々、

来廿五日二条家門(持通)室町殿渡御役送事、可相触由自日垂相被申送、

(高倉)益光、(高倉)水繼、(飛鳥)雅康等朝臣也、即加下知、

十九日壬子、

晴、御庵御出、

廿二日乙卯、

晴、故中山大納言(親通)息五歲今日日出仕始云々、入来対面、

廿三日丙辰、

晴、向中山亭、昨日儀賀之、參御所、明後日渡御御車以下事、未被仰下、如先々可致下知歟、役送三人事、先日日野殿注給之間、已相触事(盛豊力)以伊勢肥前守申之、被仰下云、御車等事念可申沙汰、任永享儀、自南御所(定別)院殿(御教女)可有御出也、可存知由被仰下、御車參人、永享誰人哉、可相尋由蒙仰退出、即參二条家門、次參南御所、事々子細尋申注給之間、(正親町三条実雅)婦參 御所披露之、永享每度三条入道内府參云々、

廿四日丁巳、

晴、明日御成方事加下知、諸大夫一人相豐朝臣參仕、布衣侍一人、布(眞基力)施下総守仰遣了、宮々可參仕云々、其外御簾役益光朝臣、御沓役永繼朝臣、御劍役雅康朝臣、御牛飼・番頭等悉加下知了、御車月日御車也、当年御修理御車也、

廿五日戊午、

晴、早旦出仕、神宮行事上卿并弁事、(万里小路)冬房卿・宣胤朝臣狀、於御前説進之、於上卿申狀者、未進三万疋事、不日不可事行歟由、被仰下間、若以近例之略儀、可存知方候哉、面々重可被仰歟由言上間、可然由被仰下了、於弁申狀以奉行可披露由、被仰出之後、退出、今日御産御祈結願、御卷数事伺申、持參御産所、以次御樽五荷兩種進上之、今夕申

剋計、二条家門 室町殿渡御、御車以下事、加下知了、自南御所御出、

日野重相參御車、御小直衣着御、(高倉水繼)藤中納言入道粧之云々、被寄御車於公卿座、先有一献云々、御牛飼・番頭・釜殿等可早參由、加下知了、

其外於所役人者、二条家門參会也、每事永享御例、先度被經御沙汰了、

亥下剋還御、於南御所更被召改御直垂云々、又有一献云々、

廿六日己未、

晴、及晚參 御所、人々行事上卿故障也、散狀入見參、以伊勢肥前守(備盛定)付女中申入了、被仰下云、万里小路大納言猶以令故障者、何人可領狀哉、念可存知、若猶令故障者、家領可被付他人由可召仰云々、畏承由申入於御所仰之、可存知由申入了、不便至也、

廿七日庚申、

晴、採桑老舞人多久時□帖曲未伝受由申之間、被下祿御馬(毛)一疋、於天王寺可伝受云々、先日被例下間、任永享九年例、就仰令下知左衛門大夫畢、為道尤殊勝御沙汰也、且者今度舞御障子絵故也、就天王寺別当伺 叡慮、(義親)事聖護院准后進奉書了、

廿八日辛酉、

雨下、弁才供養如例、自方々明日御卷数到来、

廿九日壬戌、

晴、早旦出仕、御卷数持参、御戴頂(頂戴)之後退出、明日風儀御礼、畠山左衛門佐・土岐美濃守外番衆以下進上之、

八月大

一日癸亥、

晴、拜 尊神等如每朔、其後参賀 室町殿、構見参、大方殿(日野重子)・御台御方等不及参賀、是每年儀歟予暫祇候、禁裏御憑持参料也、有別記、

予進上風流如先規、自当年進之、禁裏(後花園)・伏見殿等又同前、珍重々々、

三日乙丑、

晴、早旦出仕、禁裏御憑御使料也、退出之後参 内、小番間事也、

将又紫野大德寺入院事、龍安寺雪江住持事、自管領令申間、勅裁為

伺申者也、不可有子細由 勅答、

四日丙寅、

晴、参御所、御還礼拜領、畏存由申入退出、御香合(御花立)・祝着千万無極々々、

万幸々々、猶恩光之先表也、珍重々々、抑紫野大德寺住持職事、

自管領以法眼申送間、今日 勅裁申沙汰遣了、同紫衣綸旨任近例、同

申沙汰畢、明日沙汰了了

五日丁卯、

晴、自昼雨下、及晚又晴、依番参 内、候小御所、資綱卿(柳忠)・有有卿(基園)・

予(唐橋)・在治卿(飛鳥井)・雅保朝臣(町)・広光等也、於宿者予候黒戸、雅康朝臣・広光

兩人候鬼間、今夜御船事也、仍大飲御酒也、及暁天事了、上臈(三交天子)・典侍殿

等申御沙汰云々、

六日戊辰、

晴、放生会参行経榮(菅)、忘他事、

七日己巳、

晴、参 内、源氏御談義也、よもきふ(蓬生)・関屋まで被申之、其後有御楊

弓、見物、兩種進上之、両竹園同御祇候、及晩事了退出、於大閣者御

談義以後御退出、抑伊勢守申送云、自来十六日於高倉殿可被始行御修

法、日次如此、大阿闍梨可為聖護院准后、於尊法者、可有計御沙汰由、

可申云々、即門跡御使尋來之間、且申入了、

八日庚午、

晴、自聖准后有御使、高倉殿御祈尊法可為北斗法云々、条々又令申了、

大北斗法時、可有御祭文歟、今度如何由令不審之処、近比度々雖有此

法、不及沙汰云々、於結願者、可為来廿三日由、令申了、供料万疋切

符、今日遣了、昨日為日付、

九日辛未、

晴、参御所、小番請文番頭十人分、入見参了、合番請文有哉由、被仰

下間、依事多、番頭計分入見参由申之、将又放生会右馬頭事、兼保朝

臣訴訟之旨、女房奉書入見参、社家奉行可仰付由被仰下退出、能州神

領導行事也、即治部河内守申遣了、次参高倉御所、自十六日御祈御撫

物事為申入也、

十日壬申、

晴、参御所、広田社神馬事、伯二位申旨伺申、任先規伊勢守令下知了、

将又東寺渡御来廿二日也、御車以下事伺申、加下知者也、今日輕海郷事

兩奉行令披露之処、文書両方同前也、所存之通可尋伊勢守云々、只仰

冥助者也、女院由緒、旁於理運者無予儀者也、

十一日癸酉、

晴、宣胤朝臣入來、就 神宮行事弁本領二个所事、今朝左衛門大夫

伺申処、可被成御判由、被仰出云々、申沙汰故且祝着由賀來、馬代隨

身、所祝着也、重可遣也、自来十六日高倉殿御修法供料万疋事、未到

間、始行難叶由被申送間、伊勢守方加下知了、今夕御台自御産所御還
御々所、(足利義政女)姫君同渡御云々、万代之儀珍重々々、姫君今月中高倉御所可
有御座云々、幸甚々々、

十二日甲戌、

晴、御月忌如例、参 内、源氏御談義也、

十三日乙亥、

晴、及晚参 御所、御台還御御礼申入之、女中被出逢之後退出、今日

御会也、人々参集、於御会所一献時分也、

十四日丙子、

晴、(広橋兼直)祖父御月忌如例、放生会延引、可為来廿五日云々、仍不参行、

十五日丁丑、

晴、三五夜月明、(二条兼良)(二条教房)大閣・関白令参 内給、有源氏御談義、(初風)其後有

御連哥、兩竹園同御参、事了後有御楽、或及微声、曉更入御、又有御

和漢御言哥等、(藤盛)四条一位、(三條公綱)帥大納言以下祇候、大飲御酒也、執筆四条

中納言也、

十六日戊寅、

晴、月明、高倉殿御修法為申沙汰、入晚参 御所、

十七日己卯、

晴、(広橋兼直)御局・御庵達・南面・(綱光女兼郷ノ女)(二条政綱室)二条御料人等面々、於予方奉勸盃酌、(豊子女王)慈母同

有御座、抑小番、今日番衆内雅藤不参、自最前当年中故障由、申入故

也云々、無謂次第也、仍被召加橋通任、乍領状申遂不参、緩怠之至極

也、仍一段之御折檻之 勅書子細在之、不敵々々、

十八日庚辰、

晴、御靈祭礼無為云々、早旦上下社御旅所参詣、奉御劍、

十九日辛巳、

晴、今日面々有御帰、伯二位・(大宮)長興宿禰入来、

廿日壬午、

晴、(或)又雨下、御局新殿有御出、依番参 内、入夜参高倉殿、御修法

故也、

廿一日癸未、

朝間雨下、

廿二日甲申、

晴、参 内、有御談義、(源氏終)(松風終)次有御楊弓、前源中納言長賢卿、来廿

九日相当後崇光院殿七年御忌、可得度云々、仍大納言事御推任、帥卿

白地辞退闕也、今夕一献申沙汰之云々、予依故障不参、

廿三日乙酉、

晴、早旦参高倉殿、御卷数・御撫物・御護等、付申次進上之、御護者

三个日可申出云々、此分申入了、次参 御所、次向日野亭、(長福寺)是梅津口

舌、西御庵生涯事在之、為相談也、為之如何、

廿四日丙戌、

晴、為放生会上卿、午下剋計下向八幡、(石清水八幡宮)内々用板輿、青侍兩人、(景益)(景教)景益、騎

馬、愚息為参詣所召具也、西剋計下着大乘院、即社務令啓案内処、有

社訴数十个条、明日神事難事行云々、每年儀也、可恐、為之如何、頃

之参木以下下着云々、奉行未下着云々、尤以不審、

廿五日丁亥、

晴、放生会依社訴延引、近明日間可被行云々、奉行昨晓下向、(細川勝元)管領未

不下向云々、面々入来、

廿六日戊子、

晴、時々雨下、自京都音信、西御庵被出南御所云々、御使飯尾左衛

門大夫等也、凡此間御沙汰之次第存内事也、無益公事被取次故也、一

門之蒙然、為之如何、此闕所者 御所祇候廊局拜領也、然者此局共以

可及生涯事也、然尼公一身御沙汰、併不有故也惣而此題目一向不存

知間、且又当座所迷惑也、世上及大篇事、歎有余事也、

廿七日己丑、

晴、管領昨夕淀まで下向云々、今日早々上洛云々、是明日御成故云々、

廿八日庚寅、

晴、弁才供養如毎月令致沙汰、至今日大会不遂行、為之如何、

卅日壬辰、

晴、大会猶延引、宿院神幸可為今日由、社務并奉行申送之間、送数日

在住之処、於于今者、近日難被遂行歟、其故者、神人々々訟訴不事行

申切令退散了、將又奉行可上洛云々、仍内々面々相談、入夜令帰洛了、

装束等宿坊所残置也、徒送数日、所迷惑至極也、可恐々々、

九月小

一日癸巳、

晴、早旦奉拝尊神之後、參賀(足利義政)室町殿、御対面之後、春日局被出逢之

時、依社訴遂不被行間、数日儀令計会間、上洛候、得其意可被申入由

令人魂了、

二日甲午、

晴、八幡護摩日次、今日所令伺申也、始行可為来五日云々、令下知金剛(定意)

乘院法印了、

五日丁酉、

晴、今日大法日次所伺申也、始行可為来十六日也、委有別記、世上物

念大略事切、可及大乱体也、為之如何、梅宮問事也、山名寺就闕所

侍所令発向、僧徒令死罪間、金吾申所存故也、兩方群兵如雲霞、

六日戊戌、

晴、世上儀篇々有沙汰、廊局可及生涯云々、尤儀歟、

七日己亥、

晴、世上儀、為上意種々被仰付之間、京極彼官多賀新衛門可切腹云々、

仍山名入道畏申進上御太刀以下云々、於于今者無為也、天下惣別大慶

也、珍重々々、

參内、有御談義、あさかほ也、

八日庚子、

晴、菊綿如例年、自夜雨下、自今日於瑞雲院始作善、可為十四日云々

九日辛丑、

晴、重陽佳節、幸甚々々、早旦奉拝尊神等、參賀室町殿、構見參、

珍重々々、入夜參内、被下天酌、祝着々々、平座公卿四辻中納言、

少納言長清朝臣、弁不參、位次公卿又不參、冷然也、奉行頭左大弁

益光朝臣也、

慶福院月忌如形致沙汰了、

十日壬寅、

晴、世上物念再発、彼多賀新衛門不生涯、故種々有荒説、号徳政下辺

土一揆蓬起、在々所々打破致悪行云々、乱世併末世体也、可哀可恐、

莫言々々、

十一日癸卯、

晴、旬日也、祈念者也、及晚參御所、下辺物念、先々猶以超過云々、

狼藉無比類、例幣延引、土一揆蓬起路次難治故云々、上卿已參行之上

者、何不被行哉、昼程參詣北野社、次詣二度、觀音堂開帳為拜見也、

次向右府亭、賀昇進事、次向大宮御庵、訪申不予事、次詣瑞雲院之後、

帰家了、

「錦小路町数十町焼失、土一揆沙汰也、」

十二日甲辰、

晴、尚南炎上、諸大名至今日土一揆発向事申領状云々、何早速不申領

状哉、珍事至、為之如何、諸大名式、每事於事雅意至極者歟、天道運

當時歟、可歎々々、莫言々々、參御所、御撫物為申出也、公武面々

彼官人下辺見物不可叶子細被仰出了、入夜参 内、世上間事、被仰合
旨有之、向日野亭、又帰参、
十三日乙巳、

晴、諸大名自早旦二条・三条辺取陣云々、昨夜已悪行人打入了、抑例
幣延引不可然由、室町殿御沙汰有之、仍今日沙汰之、上卿冷泉中納言
俄故障出来之間、昨夜被仰小倉中納言了、予等入魂了、不及神事沙汰
歟、別 勅故也、路次警固被仰頭人等云々、
十四日丙午、

晴、祖父入道殿御月忌如例、於瑞雲院如形致沙汰間罷向、中食以後詣
浄花院、其後帰宅、又向三宝院、世上事管領与山名中絶、猶子自山名
取帰之間、昨夜両方儀物念云々、為之如何、自聖護院准后十六日御祈
可被延引云々、重猶申談了、
十五日丁未、

晴、御修法事伺申間、可被延引由被仰下者也、外典同延引、
十六日戊申、
晴御修法可為来廿三日也、今日日次伺定了、抑世上物念属無為歟、
京極彼官多賀新衛門弟将監、生年四十、昨夕令切腹故也、仍今日山名
金吾入道出仕、次京極大膳大夫入道出仕、各進上御太刀了、於于今者
静謐也、惣別大慶、何事如之哉、仏神之冥助也、土一揆猶以蓬起、諸

大名馳向、奉行兩人、秀典、氏秀、為上使下辺在之云々、
抑一条前宰相中將於 室町殿参会、被書将基馬、秀典、氏秀、依窮困臨于一端・益
一枚拝領、進御太刀云々、尤恩化至極、勝事也、
十七日己酉、

陰、羽田彼官人上洛由申間、可帰国由今朝申下了、無為故也、
十八日庚戌、
晴、兼顯正誕正日也、祈念、

廿日壬子、
晴、行願寺七人詣七度、清和院七人詣等進之、祈念事在之、所願成就
勿論々々、

廿一日癸丑、
晴、尊神等祈念事在之、今日三今日結願、祝着々々、
廿二日甲寅、
晴、依御談義参 内、乙女事了退出、有季・在盛等卿入来、去十九日
大流星事也、去五日小流星、彼是占文、只今 室町殿持参云々、兵乱
也、可驚々々、

廿三日乙卯、
晴、室町殿参候、変異御祈事為伺申也、有別記、土一揆自四方蓬起、
京中可破却由風聞処、今日不然、珍重、方々口々へ諸大名被仰付云々、
及晚又参御所、依御修法奉行也、
廿四日丙辰、

晴、大流星御祈、諸社・諸寺今日相触了、始行可為来廿九日也、自今
日寛濟僧都入来、有行法、当月分也、依路次物念今日下山云々、
廿五日丁巳、
晴、依番参 内、入夜帰参、
廿六日戊午、

晴、早日参御所、為修中御加持申次也、先諸大名御対面之後、奉行披
露事在之、其後参御前申事由、即立御障子、可有御御コンカウ出御脇
戸外、聖護院御體申准后、事了如元御コンカウ取出置之、次開御障子退、次又奉
行猶有披露事、至今日七今日別願祈念結願、珍重々々、
廿八日庚申、

晴、弁才供養如例、
廿九日辛酉、

晴、早旦參^(參 齋 鎌 行)御所、御卷数持參、依余醉無御出、付申次進女中、次嵯峨御出、今日開山基儀也、御車以下事昨日相觸了、御車^(大進寺)自昨夕渡金剛院、番頭・御牛飼・釜殿以下如例加下知、殿上人益光^(馬丸)・永繼^(高倉)・雅康等朝臣、諸大夫一人相豊朝臣子行清、如例年予加下知、布衣一人、御出奉行布^(貞基)施下野直伺申云々、

「綱光公神今食參仕記」

寛正三年

六月

十一日、晴、入夜行水以後參、束帶、駕八葉車、小雜色少々召具之、參神祇官、神今食依卜合也、月次祭近代兼行也、弁未參程也、北序北面停□頃之宣胤朝臣參仕、即幣裏、事了告之、予着北門東脇座、

^{西面、掛}召々使、^{声、}二、^{○以下}書カズ、^{等如例、}